

あるふれ合い

老人ホーム「任運荘」のある寮母の手記が福祉専門誌「老人生活研究」十月号に掲載され、いま静かな共鳴を呼んでいる。内容はホームの老人をたたいてしまったことをめぐる悔恨かみこんの情の赤裸々な告白である。

たしかに、たたかれた老婆Fさんは激しい情緒障がい者で全寮母にとってこわい存在、そのうえ彼女は新任だった。夜勤の午前二時、Fさんのおむつを替えようとしたら、「何しに来たんか。めぎつねめ」とののしられ、われに返った時はすでにたたいてしまっていた。後の祭りである。彼女には停職二十日間の処分。老婆のほおに残る手のひらの跡は三日間も消えなかった。

謹慎の解けた日の早朝、彼女はまずFさんのベッドに直行している。

—「Fさんごめんね。ほった痛かったです。私も痛かった。ぶった手も心も。私が悪いんだから、どんなにしかられてもいい」といいました。しばらくしてFさんは一言「もういいわえー」。私は耳を疑った。Fさんの声は柔らかかった。その日の

夕食時、車椅子に乗せようと介助する私に、「あんたが連れちつちくるんなー」と。その時の嬉しかった気持ち、言葉でいえませんが。

過失の深さを知ればこそ、彼女は老婆の固く閉ざした心を開けたのである。ただ謝らねばという一心、それが二人を一つに結び合えたのである。「お前が連れていってくれるのか」。人間らしい言葉が入所して六年間、初めて聞かれたのである。息子たち肉親がいるのにまだ一度の面会もない。心の触れ合いはドロドロした人間かつとうの中でも生まれるものなのか。ああ、狂気のさ中でも魂は響きあえるのか。

この若い寮母は手記をこう結んでいた。

― 任運荘の理事長はホームの見学者には必ずいいいます。「施設はこわいところで」と。私のことをいっているようで、胸にずきんとくるのです。

(一九八一年十月十七日)